

A Semantic Analysis of Ajectives Concerning Time and Distance inChinese Language

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Otaki, Sachiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/752

時間と距離に関する中国語形容詞の意味分析

大 滝 幸 子

1. はじめに

本稿は、中国語の“远・近”（距離が遠い・近い）“快・慢”（スピードが速い・遅い）“晚・早”（時刻が遅い・早い、遅れる・早すぎる）の三対の形容詞を、考察対象としてとりあげる。そして、次の二つの調査研究を通して、中国語における時間と距離の概念の特色を探ろうとするものである。

- (1) “远・近” “快・慢” “晚・早” の文法的機能の特徴と語義上の特徴をあきらかにする。
- (2) 日本語形容詞「遠い・近い」「速い・遅い」「早い・遅い」と比較対照する。

2. 従来の研究－6種類の文法構造における用法

陆俭明1990“VA了”述补结构语义分析《汉语学习》第一期（总第55期）pp1-6.（以下、陆1990. と略称する）では、褒貶形容詞（プラスの価値をもつ意味であるか、マイナスの価値をもつ意味であるかが判然と区別できる形容詞）^①と、それ以外の形容詞とをわけている。“远・近” “快・慢” “晚・早” の3対はいずれも褒貶形容詞以外の4種類の形容詞、すなわち

1. 量度形容詞 2. 表颜色的形容詞 3. 表味觉的形容詞 4. 其他のうち、“量度形容詞”（以下、計量形容詞と訳す）に属させられている。

この計量形容詞については、すでに、陆俭明自身による、1989 说量度形容词《语言教学与研究》第3期pp46-58. (以下、陆論文、と略称する) という論文で考察が加えられている。その内容を要約すると次のようになる。

(アンダーラインは本稿でつけたものである)

計量形容詞は、すべて対をなしていて、一組 (Aa とする) は大きい方向を表し、もう一組 (Ab とする) は小さい方向を表す。そして形式上の判別基準としては次の、「隔たりの程度を表す構造の中で使われる」を用いる。

A + (了) + 表示定量的数量词 (この形式は後出の【S2】①に相当する)

【計量形容詞と認められた13対 (+2個) の形容詞のリスト】

Aa : 表示过量 (超過量を表す)

Ab : 表示不及 (不足量を表す)

大 (了) 一平米

小 (了) 一平米

长 (了) 三公分

短 (了) 三公分

高 (了) 三公分

低 (了) 三公分 矮 (了) 三公分

宽 (了) 两公分

窄 (了) 两公分

厚 (了) 一公分

薄 (了) 一公分

深 (了) 二十公分

浅 (了) 二十公分

粗 (了) 一圈儿

细 (了) 一圈儿

重 (了) 三公斤

轻 (了) 三公斤

远 (了) 两公尺

近 (了) 两公尺

快 (了) 三秒

慢 (了) 三秒

晚 (了) 二十分钟 迟 (了) 二十分钟 早 (了) 二十分钟

贵 (了) 八毛钱

贱 (了) 八毛钱 便宜 (了) 八毛钱

多 (了) 四个

少 (了) 四个

そしてさらに、これらの計量形容詞が6種類の文法構造【S1~S6】の中でどう使われるかについて、おのおの特徴が述べられている。以下、具体例としては本稿で扱う、“远・近” “快・慢” “晚・早” の用例のみを引用する。

時間と距離に関する中国語形容詞の意味分析 (大滝)

【S1】：有+数量成分+A (Aa里的“大, 长, 高, 宽, 厚, 深, 重, 远”)
有五里远

有三根电线杆子远 (物体で数値の代用にすると“粗”も使える)

【S2】：A+数量成分=①述宾结构 (計量形容詞であるかどうかを判別する
判断基準として用いられる場合)

②主谓结构 (Aa里的“长, 高, 宽, 厚, 深, 重”)

Aaの中の“大, 粗, 贵, 多, 远, 快, 晚”と、

Abは、②の意味を表せない。

cf. 那木板长30公分, 宽20公分, 厚三公分。

(長さが30センチ, 幅20センチ, 厚さ3センチ)

【S3】：不+A (一般の形容詞の場合、肯定形は必ずその形容詞Aとなる)

①甲=“不A”的肯定式是相应的A (一般形容詞と同じ)

①乙=“不A”的肯定式是表示偏离义的 (隔たりを表す意味)

“A+了”

Aa	[那诱饵放得离洞口不远 ←→	那诱饵放得离洞口远了
		我走得不快 ←→	他走(得)快了
		他来得不晚 ←→	他来(得)晚了
Ab	[这两行的距离不近 ←→	这两行的距离近了
		你走得不慢 ←→	我是不是走(得)慢了
		他来得不早 ←→	他来(得)早了

②“不+Ab”含有“够Aa的”附加意义 (「充分にAaである」)

Ab—他跑得不慢 = 他跑得够快的

例外：“晚・早”のAa・Abの關係が逆転する。

Aa—他今天起得不晚 = 他今天起得够早的

【S4】：很+不+Ab (+了) = 很+“不+Ab (了)”
= “够Aa的 (了)”

Aa は“很+不+ —”の中では使えない。

很不近 (了) ※很不远 (了)

很不慢 (了) ※很不快 (了)

很不早（了） ※很不晚（了）

【S5】：老+Aa

例 Aa（例外：“快，多”は使えない）
Ab（例外：“早”は使える）
外 非量度形容词（“胖，硬，肥，烫”は使える。ただし語気詞の
“的”を必要とする）

我老远就看见他了。

他老晚才回家。 他老早就来了。

【S6】：V+A+了

Aの語義が指す内容には4種類ⅠⅡⅢⅣがある²。

Ⅰ. 動詞Vそのもの : Aは“快，慢”“晚，早”のみ。

他走快了。 他跑慢了。

他来晚了。 他来早了。

Ⅱ. 動詞Vの施手または受け手の移動距離 : Aは“远，近”のみ。

他走远了。 他坐近了。

那球踢远了。 那盆花搬近了。

Ⅰ. Ⅱ. のパターンは次の2種類①②の文法的意味を表せる。

どちらの意味を表すかは、前後の文脈によって決定される。

①結果の実現

②予期した結果からの隔たり

过去他老迟到，经大家批评后，最近他来早了。（①結果の実現）

你来早了，用不到那么早来，现在挂号不紧张。（②隔たり）

他慢慢地走远了，消失在人群之中了。（①結果の実現）

这次你又走远了，再往这里走几步。（②隔たり）

（本稿のインフォーマントは、“他来早了。”と“老迟到”との対比に抵抗があった。“来早一些”“早一些来”“来得早”なら可）

Ⅲ. 動詞Vの施手（動作主と訳されることが多い）

Ⅳ. 動詞Vの受け手

時間と距離に関する中国語形容詞の意味分析 (大滝)

以上【S1～S6】の文法構造の中での用法を、本稿で取り上げる3対の形容詞について整理してみると、【表I】のようになる。使用原則のうえで使えたとされた箇所に形容詞を書き込み、(使用原則に反して)日常的表現で使えないと報告されている箇所に※印をつける。(※印の用法は、以下同様)

【表I】	【S1-S6】の使用原則	远・近	快・慢	晚・早
S1	有+数量成分+Aa	远	※	※
S2	Aa + 数量成分 (主述構造)	※	※	※
S3	“不A”的肯定式=“A了”	远・近	快・慢	晚・早
S4	很+不+Ab (+了)	近	慢	早
S5	老+Aa	远	※	晚・早
S6	V+A+了 (動作を指す)		快・慢	晚・早
S6	V+A+了 (移動距離を指す)	远・近		

3. 5種類の統合型⁴³⁾における用法を通して判明する語義的・文法的特徴

本項では前項の【表I】で整理した6種類の文法構造【S1～S6】のうち、【S1～S5】における用法を再検討し⁴⁴⁾、さらに新しい言語資料を加えることにより、3対の形容詞の新たな語義的・文法的意義特徴を見いだしていくことにする。

3-1. 【S1=有+数量成分+Aa】における用法の再検討

計量形容詞の対のうち、Aa (大きい方向を表す) が「判断対象の中から感知することのできた、一定の方向性を持った数量として計量できる知覚 (これを「計量知覚」と名付ける) を代表して表す」ということは、中国語では早くから注目されている。

日本語では“遠い”が計量知覚「遠さ」を表し、“近い”が計量知覚「近

さ」を表し、双方併せた上位の計量知覚として「距離」という概念が存在している。つまり、形容詞が表す様々な知覚・感覚等を抽象的概念として表せる統合型【形容詞の語幹+接尾辞“さ”】が存在しているために、“遠い”という形容詞にとって、「代表して計量知覚（距離）を表示する」という文法的意義特徴はそれほど重要ではない。

しかし中国語の計量形容詞ではそうではない。スクールグラマーの初期の段階で取り上げられる、数量を尋ねる表現のプロトタイプ（典型）を例として、検討してみよう。

【多+Aa?】（【S疑問】統合型と名付ける）

离学校（有）多远？（どのくらい遠いですか？）

这趟车（有）多快？（どのくらい速いですか？）

今天的会开到多晚？（どのくらい遅くまでかかりましたか？）

日本語では、「どのくらい近いのですか？」「（この列車は遅いとは聞いていますが、いったい）どのくらい遅いのですか？」「（明日の出発は）どのくらい早いのですか？」という表現に違和感を感じる話し手は希であろう。しかし中国語では、距離、スピード、時刻の経過、すなわち計量知覚についての程度を尋ねようとする場合、優先的に“远、快、晚”を用いる。大きさ、太さ、値段などを尋ねる場合にも“多大、多粗、多贵”の表現が優先される。つまり、中国語の計量形容詞では、計量結果の数値を具体的に尋ねようとする場合、「判断（に使う）スケールを数値が増加する方向性で用いた」形容詞Aaを使うのが、プロトタイプの表現である。

そこで、この【S疑問】統合型は文法的語義的には次のように分析できる。

【S疑問】の統合意義特徴の図式

【一定の方向性をもった数量変化の程度をたずねる副詞“多”+

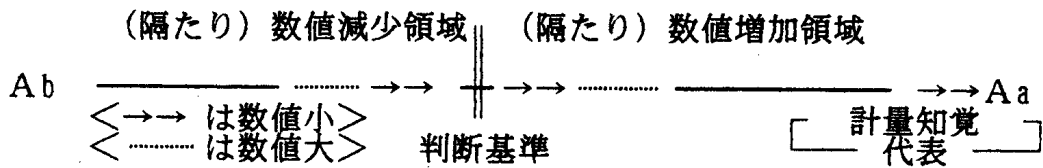
計量知覚を代表し判断スケールの数値増加を表示する計量形容詞Aa】

ここで、計量形容詞Aa の判断方法に関する次の2つの弁別的特徴⁵⁾を図示すると【図I】のようになる。

①計量知覚を代表する

②判断スケールの数値増加を表示する

【図 I】 計量形容詞の判断方法



統合型【S疑問】において、判断スケール数値増加の方向を表示するAaが優先されているのは、“多”の弁別的特徴である「数値の大きいことを表示する」という語義的意義特徴との呼応が容易であるためとみなせよう。

計量形容詞Aaのうち、【S疑問】で用いられないのは“多”だけである。その原因として、まず“※多多?”という繰り返しが音声的に嫌われることがあると考えられるが、次のような推論も成り立つのではないだろうか?

“多・少”は計量知覚としての数量の大小を表示するのみで、判断対象が何であるか(何の数量であるか)について特定の規定をもたない。またどうやって計るか(どの感覚を使うか、判断スケールの形や判断基準を何にするか)という判断方法についても特定の規定をもたない。つまり、語義的には判断結果である「数量の大小」だけを示すために、「数値置き換え」とも言える文法的意義特徴をもつようになるが、【S疑問】統合型内では疑問副詞“多”がもつ判断方法についての意義特徴と共起できないために、使うことができない。

こういう文法的意義特徴をもつために、計量形容詞のなかでも“多・少”は一つの下位範疇を形成しているといえる。

では、プロトタイプの統合型【S疑問=“多”+Aa】の中のAaの代わりに、Abを用いたらどのような表現になるであろうか?

○“多近?”は日本語と同様、文脈に拠って「距離が近いこと」が前提とされている場合は、日常的表現として距離を尋ねるのに用いられる。つまり、数値が減少する方向で尋ねるといふ、文脈の表す「文脈意義」が補充されることによって、数値減少の領域で判断スケールを動かす“近”を使う条件が整えられる。すなわち、「近さを計量知覚とする文脈意義」に拠って、“多”

が疑問副詞として尋ねる数値の領域を“近”の表す「(隔たり) 数値減少の領域」へ移動することが行われたと解釈できる。

“多近?”が発語の句としては使いにくいことも、この解釈を裏付けている。

なお、日本語の「どのくらい～」という疑問副詞には、“多”の意義素に含まれる「一定方向へ数量を計る」という語義的意義特徴が存在しないため、「どのくらい遠いのですか?」「どのくらい近いのですか?」という双方の方向へ尋ねる表現がともに非プロトタイプとは感じられないのであろう。

○“多慢?”は抽象的な判断対象のスピードについてなら「どのくらいユックリか?」という数値(スピード)減少の程度を尋ねる疑問表現になる。つまり、計量知覚はタイムウォッチで計れるような移動速度ではなく、状況変化の進展具合となる。“多慢?”は“多近?”に比べて、補充されるべき文脈意義がより多くなっている、言い替えると使用するための条件が厳しくなり、判断対象が限定されている。例えば“速度”は、“快・慢”の計量知覚を抽象的に表示する名詞であるので、主語の一部として判断対象を表したなら、“多慢?”の表現は無理なく使えるようになる。

[経済の発展速度について]

A国的经济发展速度多慢?(速度はどのくらいユックリですか?)

それに対し具体的な計量ができる移動速度についてなら「どれほどユックリだというのか?!」という反問の表現となり、通常の疑問文にはならない。または“多”が感嘆を表す陳述副詞“多么”と同義になり、「なんと遅いのか!」という、感嘆文をつくる。(和訳は要点だけに止める。以下、同様)

[交通事故の責任を争う場面]

你开得多慢?! (どのくらいのスピードだったというのか?!)

车开到多慢?! (どこまでスピードを落としたというのか?!)

[歩みのノロイものどおしを比較する場面]

牛比羊走得要慢, 牛走得多快? ※牛走得多慢?

(牛はどのくらいのスピードで歩きますか?)

你看! 牛走得多慢! (牛ってなんとユックリ歩くんだらう!)

○“多早?!”も通常「どれほどハヤイというのか?!」という反問の表

現または感嘆文「なんと早いのだろう！」という意味を表す。しかも、常に予定よりハヤイとか、いつもよりハヤイ、という含意がある。そして、単純に時刻だけを尋ねる表現にはならない。

さらにまた、“早・晩”と“快・慢”との違いとして注目すべきことは、一般の疑問文に用いられる“多晩？”の方も単なる時刻を尋ねるのではなくて、基準時刻からの遅れを表すことである。(用例中の→印は聞き手からの応答句を示す。以下、同様)

今天的会开到多晚？ [疑問文または反問]

(どのくらい予定時間をオーバーしましたか？)

(どれほどオーバーしたというのですか？！)

今天的会开得多晚！ [感嘆文] → 那几时结束呢？

(なんと遅くまでやっていたことか！) → (いつ終わったの？)

※今天的会开到多早？

今天的会开得多早！ [感嘆文]

(なんと早くから始まったことか！)

→ 在约定时间前几时开？

→ (予定時刻前だというのに、いつ始まったの？)

そこで“晩・早”は判断方法の一部、判断基準について「常に時刻を比較するための基準時刻が具体的に存在している」という弁別的特徴を持つと考えられ、この点で計量形容詞の一つの下位範疇を形成すると考えられる。このことは、のちに触れる、比較のための4つの判断基準のうち、「具体基準」を常に用いていると記述し直すこともできる。

日本語の“(時刻が)遅い・早い”と比べると、“遅い・早い”のほうは「判断基準として具体基準を用いる」という文法的意義特徴を弁別的特徴にしていなかったために、形容詞・副詞(連用活用形)として時刻を単純に述べることができる。中国語と日本語との差異がはっきり現れる、数値を尋ねる表現のプロトタイプをもう一例、挙げておく。

今天我有会，可能晚些回来。 → 多晚？

(いくら遅く帰ってくるかもしれない) → (どのくらい遅くなる？)

今天事儿少，可能早些回来。

→几时？ ※多早？

(いづらか早めに帰ってくるかもしれない) → (何時ぐらい？)

→ (どのくらい早くなる？)

さて、次に【S1=有+数量成分+Aa】の統合意義特徴の考察にはいる。

【S1】は通常は【S疑問】に対する応答句として用いられる文型である。ところが【S1】では【S疑問】で用いられた計量形容詞Aaのうち、“快・晚・貴”は用いることができない。

“貴”の意義素を素描するならば、「事物の販売価格について不定人称者にとって負担であるかないかを判断する・その結果、数値が負担であると判断をください」⁶⁾となるであろう。その意義素の内容を意味的事項に分けて考えるならば、数値だけを表示する“多・少”と異なり、判断方法についての規定をも表示しているために、【S疑問】統合型で用いることができたと考えられる。しかし、【S1】で使えなくなるのは何故であろうか？

【S疑問】で用いられるのに、【S1】では用いられないという、共通の文法機能を持つ“快、晚、貴”には、何らかの共通の文法的意義特徴が存在すると予想される。そしてまた、【S疑問】でも【S1】でも用いられる、“大、长、高、宽、厚、深、重、远”（本稿のインフォーマントは“粗”も完全にこのグループに入れた）にも、共通の文法的意義特徴が存在すると予想できる。

“快、晚、貴”は、計量形容詞Aaとして、その判断スケールを数値増加領域にあてるといふ判断方法は共通しているが、その計量知覚には次のような差異がある。

“快”=ある物体の移動するスピード（単位時間内の移動距離の数量）

“晚”=ある出来事が事実になる時刻と、あらかじめ予定された時刻との隔たり（基準時刻を超過する数量）

“貴”=ある物体の販売される価格

上記の計量知覚は一見何の共通点も無いようであるが、“快、晚、貴”に共通の文法的意義特徴は、この計量知覚について見いだすことが出来る。

【共通特徴Ⅰ】判断対象である物体や出来事の本質とは無関係に、人為的に、その数量を変化させることができる。

【共通特徴Ⅰ'】判断対象である物体や出来事にとっては、叙述時点で認められる一時的性質(数値)を示す。

それに対して【S1=有+数量成分+Aa】の中で用いられる“大, 长, 高, 宽, 厚, 深, 粗, 重, 远”の計量知覚は、判断対象である物体そのものの形状に備わった「大きさ、長さ、高さ、幅の広さ、厚さ、深さ、太さ、重さ」そして固定された2点間を判断対象としてスケールをあてた「距離」である。いづれも、上記の【共通特徴Ⅰ】【共通特徴Ⅰ'】を持っていない。そして、その判断結果である数値が変動するには、人為的操作によって判断対象そのものが変質させられる必要がある。したがって、同一の(質の)物体を判断対象としている限りは、数値に変動が生じないとみなせる。このことは共通の語義的意義特徴として記述できる。

【共通特徴Ⅱ】判断対象である物体にとって、恒久的属性とみなせる数値(変動不可能な数値)を示す。

そこで【S1】統合型は文法的語義的には次のように分析できる。

【S1=有+数量成分+Aa】の統合意義特徴の図式

【存在と帰属を表す“有”+変動不可能な数値を表す“定数量”表現+計量知覚を代表して表す“Aa”】

3-2. 【S2②=Aa+数量成分】(意味上での主語述語統合型)における用法の再検討

【S1】の統合意義特徴を検討する際に“多(少)”と“快, 晚, 贵”を他のAa“大, 长, 高, 宽, 厚, 深, 粗, 重, 远”と区別した。【S2②】では、さらに“大, 长, 高, 宽, 厚, 深, 粗, 重, 远”の中から、“大, 粗, 远”を区別する文法的意義特徴を探る。この3個の計量形容詞は、【S2①】

すなわち、隔たりを表す統合型でしか用いられない。

大30厘米：大30平米（より30cm大きい：より30m²大きい）

（※大きさ30cm：※面積30m²）

粗30厘米（より30cm太い）（※太さ30cm）

远30米：远30厘米（より30m遠い：より30cm離れている）

（※距離30m：※間隔30cm）

なぜ、この3個の計量形容詞は【S2②】の統合意義を表さないのであろうか？本稿では【S2②】で用いられる計量形容詞“长，高，宽，厚，深，重，”に共通の語義的意義特徴を検討して、【S2②】を文法的語義的に次のように分析した。

【S2②計量形容詞+数量成分】の統合意義特徴の図式

【物体の形状を触覚で、かつ一次元的‘?’にはかる計量形容詞Aa+
変動不可能な数値を示す“定数量”表現】

上記の分析に基づいて解釈するならば、まず、“远”は物体の形状を表さないために【S2②】では用いられないと考えられる。

また、“大，粗”は物体の形状を表すが、直線的スケールを用いず、平面の面積・立体の体積（またはその周囲）を多次元的スケールではかるために【S2②】では用いられないと考える。なお、“重”については「下方垂直方向への重圧感」を計量知覚に対する判断スケールとして認め、一次元的はかりかたの変種として認めることにする。

ここで、“远”の語義的意義特徴の2面性について、“快，晚”と対照しつつ検討しておく。“远”は“快，晚”と異なり、【共通特徴Ⅱ】を有してはいるものの、「2点間の距離」という「2つの地点（または物体）の存在を前提とした計量知覚」を持つ点で、ひとつの個体としてまとまった物体の形状を表す“大，长，高，宽，厚，深，粗，重，”とは異なっている。（“高，宽，深”の計量知覚には一部“远”と類似した特徴もある）そのために判断方法に次のような違いが生じてくる。

物体の形状が「触覚」を判断スケールに用いることができるのに対し、離れた地点の距離は原則として「一目瞭然の距離感覚」の他に「視覚の直線的移動感覚」を判断スケールに用いる。

その結果“远”の判断方法には“快・晚”と共通の次の文法的意義特徴が含まれる可能性が生じる。

【共通特徴Ⅲ】判断をくだすのに時間をかける必要があり、時間の経過に伴う変化に対して判断をくだす。

またさらに、判断対象が2つの地点ではなく、一方または双方ともに「移動させられる物体」である場合、「判断に時間の経過を伴う」という【共通特徴Ⅲ】が機能すると同時に、その文脈意義と呼応する際に“快, 晚”と共通する一対の【共通特徴Ⅰ, Ⅰ'】をも、関連特徴^⑨として選択すると考えることができる。その選択がおこなわれる用例のプロトタイプとしては、移動を表す動詞と組合わさった統合型内において動詞が表示する語義的意義特徴との呼応例が挙げられる。この場合の“远”の語義は日本語の「遠い」とは異なり、「(「くっついている」に対する) 離れている」という一時的状態を表し、例えばテーブルの上の物の間隔や荷物の置き場所にも使うことができる。

你看这个和那个离得多远? →就有一指远。

(どれくらい離れていますか?) → (ほんの5 cmぐらいです)

请把这个稍挪远点儿, 行吗? (離して置いてくださいますか?)

3-3. 【S2①=A+数量成分】(意味上での述語目的語統合型)における用法の再検討

以上の分析結果をふまえて、ここで計量形容詞であるかないかの判定に用いられた統合型【S2①=A+数量成分】の統合意義を改めて検討する。そして、その統合意義特徴を分析するとともに、計量形容詞の定義を本稿の術語で記述することにする。

まず、【S2①= A + 数量成分】の統合意義は次のように記述できよう。

- 1) 隔たりの程度を表すということは、この統合型には必ず比較の対象とされる何らかの基準が存在していることである。それは形容詞の判断対象との関わり方によっていくつかの種類があり、文脈内で叙述されたり、場面内で指示される。本稿では比較のための基準を4種類認める。
 - ・具体基準（判断対象と同類であるところの、他の事物の数値）
 - ・常識基準（その判断対象にとって社会的に認められた標準的数値）
 - ・旧態基準（その判断対象にとって以前示したことのある数値）⁶⁰
 - ・期待基準（文脈、場面内でその判断対象にとって適正とされた数値）
- 2) 数量成分が不定量“一点儿”である場合、「比較のための基準として設定された数値・属性、性質、状況、感覚感情を起点として、その形容詞が表す判断スケールの領域の極点へ向かって判断スケールが少し動いた」ことを表す。話し手から聞き手に遂行命令を伝達しようとする場合は、「形容詞の命令形式」として用いる。
- 3) 数量成分が定量（具体的数値）である場合、計量形容詞しか使えないということは、その「一定方向に判断スケールを動かす」という弁別的特徴が、統合意義特徴としても弁別的特徴になることを意味する。それゆえ「比較のための基準として設定された数値が判断基準として、数値が減少 してくる方向から、または増加していく方向へと判断スケールが動いた」ことを表す。その結果、判断結果には判断基準を中心として数値の超過、または不足という価値観が伴う。（【図I】参照）

このように、【S2①】では数量成分が不定量であるか、定量であるかによって、統合意義に差がみられる。定量の場合の統合意義特徴は次のように分析できる。

【S2①= A + 数量成分（定量）】の統合意義特徴の図式

【ある比較のための基準を判断基準として判断スケールをあてる“A” +
 増加していく方向に隔たりがあれば超過量となる
 減少してくる方向に隔たりがあれば不足量となる】定数量表現】

そこで、計量形容詞の意義素内の弁別的特徴(定義)が、こう記述できる。

【計量形容詞の定義】

- ①一定の方向で判断スケールを動かす。
- ②判断スケールに対して判断基準を設定することにより、一对の形容詞がおのおの表示する「判断スケールの領域」を分けることになる。
- ③定量すなわち具体的数値で判断スケールの動きを表現できる。

3-4. 【S3①甲= 不+A→A ;

S3①乙= 不+A→A+了】 (→印は肯定型への変換マーク)

【S3②=不+Ab→修+Aa+的】 (→印は肯定型への変換マーク)

【S4= 很+不+Ab】

以上4種類の統合型における用法の再検討

上記4種類の統合型において“远・近”“快・慢”“晚・早”が他のAa・Abと異なる用法をみせている箇所は、2箇所ある。

(1) 【S4】において、本稿のインフォーマントが“很不远”“很不快”“很不晚”“很不贵”“很不多”というAaを用いた表現が一定の文脈で使えることを認めたこと。

(2) 【S3②】において、他の統合型ではAa扱いされてきた“晚”と、Ab扱いされてきた“早”との用法が入れ替わること。

以下、順をおって、この問題点が生じた原因を考察していく。

3-4. 1. “很不远”“很不快”“很不晚”“很不贵”“很不多”の検討

まず、AbがAaとの間にもつ示差的特徴を見いだすために、Abしか使えない【S4】の統合意義特徴を最初に検討する。

【S4= 很+不+Ab】における用法を再検討するために、“很不”で修飾される形容詞についての、次の論考を参考にする。

马真1986, 「“很不一”补说」《语言教学与研究》第2期

周时挺1988, 「也说“很不一”」《语言教学与研究》第4期pp55-62,

両者とも原則として「褒貶形容詞のうちの褒義形容詞、計量形容詞の中の
数值減少領域の形容詞（陆論文1989でのAb）が用いられる」と指摘している。

以下、周論文1988.を要約する。（A, A（褒義）, A（貶義）, は形容詞）

- 1) “很”は程度副詞である。“不A”が程度差を表すならば“很不A”
の構造が成立する。
- 2) 褒義（褒める, 肯定する, 望ましい）は直接A（褒義）で表現するが,
貶義（けなす, 否定する, 好まない）は否定形“不A（褒義）”で表
現することもできる。語義をやわらげる修辭法の一つであり、“不A
（褒義）”の構造は程度差を表せる。
- 3) 数量、容量、重量を表す形容詞では分量が少ないAに“很不A”を用
いる。なぜならものごとは小から大, 少から多へと発展するので、そ
の小・少を達成しやすいこととみなし、大・多を達成しにくいことと
みなす習慣があるからである。つまり、“容易”と“困难”という褒
義と貶義との相対関係に似た関係が認められるからである。

そしてさらに、“不A（貶義）”が例外的に成立する例として、否定形が
固定されたイディオムとして、特殊な意味（しかも褒義）を表す形式：很不
简单, 很不错, 很不坏, などを挙げている。

また、褒義を表す形容詞の中で例外的に“很不A”の構造にはならない形
容詞として次の3グループの形容詞を挙げている。

A) 形容詞自体が“很”または“不”の修飾をうけない

※很不雪亮 ※很不卓绝 ※很不优秀 ※很不完完整整

B) 書き言葉としてしか用いられない

C) 接尾辞“然”がついている

この周論文は言語事実を正確に指摘し、的確に整理を加えてはいるが、次
の2点については異論を述べたい。

- ①副詞“很”が程度を表すと記述するのみで、それに呼応するとみな
した“不A”が表す程度差の内容を吟味していないこと。

②計量形容詞と褒貶形容詞とを結び付けて解釈すること。この解釈は文学的でもあり、例証を挙げての検討は見送ることにする。

○そこで次に、程度副詞“很”の文法的意義特徴を検討することによって、形容詞にとっての「程度」とは何か？判断スケールの実体は何か？について考察することにする。それから“很”と組合わさる形式として“不+Ab”の考察にすすむことにする。

程度副詞について論考した論文として、次の2篇取り上げて検討を加える。

陆俊明1980, 「“程度副词+形容词+的”一类结构的语法性质」《语言教学与研究》第2期

周小兵1995, 「论现代汉语的程度副词」《中国语文》第2期

前者は単音節(A)と2音節(AB)という形式上の区別を形容詞にたて、後者は褒義形容詞、貶義形容詞および中性形容詞の3グループを分けている。

(引用箇所の陆は陆論文、周は周論文の分類名を示す；f=副詞の略称；

C=C classの頭文字)

【程度副詞のリスト】

f A / f AB 的 (陆) = 绝对程度副词；简称为“绝对词” (周)

C₁ (周) C₁₁ 太

C₁₂ 很, 非常, 怪, 挺, 相当

C₁₃ 有些, 有点, 不大, 不太

f' A / f' AB 的 (陆) = 相对程度形容词；简称为“相对词” (周)

C₂ (周) 多项比较 最, 顶

双项比较 更, 还_(1,2), 更加, 越发, 稍, 稍微, 略, 多少

(c. f アンダーラインは陆論文が扱った形容詞)

以下、“很”に関わる論考だけをぬきだす。

【陆】

	deの前の形式		主语	谓语	补语	定语	状语
+ = 可 - = 不可	f A / AB	很 Ade	-	+	+	+	34% +
	f' A / AB	最 Ade	+	-	-	+	好快大

【周】“绝对词”“相对词”の違いは次の3点に要約できる。XYは形容

詞の位置を表す。

(1) “相对词”は6種類の比較型の中で用いられるが、“绝对词”は用いられない。(马真1988, <10>に拠る)

(2) “相对词”は“度量词”を後ろに加えられるが“绝对词”は加えられない。

最好不过(了) 越发瘦了许多 多少安静一些

(3) “绝对词”は“性质形容词”“助动词”“表示心理活动的动词”“其他(像, 有)”と組合わさる。“相对词”はそのほかに更に、“方位词”“表具体动作的动词”の前に置いて使える。

最前面, 最东边 更加跑得快了 稍微放低点儿

“绝对词”のなかでの“很”の特徴は次のように記述されている。

- 1) “很”“太”は褒貶形容詞、中性形容詞すべてに用いられる。“有些, 有点儿”は褒義形容詞には使えない。“不大”は中性・貶義形容詞には使えない。“不太”は貶義形容詞には使えない。
- 2) “很”が属するC12の副詞には感情的色彩がない。
- 3) 【太+X+的】統合型は主語(“的”字句)になれるが、“很”を始め、他の“绝对词”はなれない。 <11>

以上の諸論文の用法記述を本稿の立場から分析して、「“很”が表す程度」とは何かを文法的意義特徴というかたちで記述しなおし、かつ裏付けとなる用例を補充すると次のようになる。

① 判断をくだす際に、判断基準として比較のための4基準を用いない。しかし“很”を“非常”“有点”などと比べると明らかに何らかの程度差が存在する。比較することなしに判定される程度差とは、何を基準として判定されていると考えればよいであろうか？

“很”は“非常”などと比べると数値の極大・極小などに関しては述べていないことが、外国人学習者にさえ素朴な語感により認められる。

北京語言学院が編纂してきた外国人向け中国語スクールグラマーの代表的

教科書の中でも、“很”についてまず強調してきたことは、次のような文法機能である。(12)

在肯定的陈述句里，简单的谓语形容词前常用副词“很”。这里“很”表示程度的意义已不明显。如果单独用形容词作谓语，就带有比较的意思，一般用在对比的句子里。例如：男学生多，女学生少。

(《基础汉语课本》外文出版社1978p125)

肯定文の中で簡単な述語形容詞の前には普通、副詞“很”が用いられる。この場合の“很”は程度を表現するという意味が不明瞭になっている。もし、単独で形容詞を述語にするならば、比較の意味を帯びることになり、通常は対比文の中で用いられる。例えば「男子学生は多いが、女子学生は少ない。」(翻訳：本稿)

日本語や英語の形容詞ではこのような対比性との深い関係がみられないので、特に注意を喚起する必要があったものと思われる。

本稿ではこの“很”が果たす文法的機能は“很”の意義素のなかに次のような文法的意義特徴があるために生じると解釈することにする。

○まず、本稿でその意義素を考察してきた計量形容詞の場合は、“很”によって「判断スケールが、数値の増加領域または減少領域のどちらかに固定された」ことを表されるもの考える。判断スケールが固定されると、判断結果はもはや方向性をもつ数量ではなく、どちらの領域に固定されたかという特徴だけに注目される数値へと変化する。

そして判断基準の果たす文法的機能も、比較のための基準ではなく、領域をわけた「分割基準」(この場合、どちらの方向性をも持たない点)として発揮されると考えられる。何かを排斥したうえで何かを選択する叙述の営みは、文を言い切る陳述機能がかぶせられやすい典型的な叙述パターンのひとつである。“很”は分割基準を【“很”+計量形容詞】の統合意義特徴として持ち込むことによって、片方が選択されなかったことを示すという選択の叙述を営み、その結果、計量形容詞を述語とする句を言い切り易くしている。

○計量形容詞以外の“很”で修飾される形容詞を本稿では朱德熙1956⁽¹³⁾の分類名に従い、性質形容詞と呼ぶ。そして、計量形容詞とあわせた形容詞

グループを「判断形容詞」と名付けることにする。

この性質形容詞の場合は計量形容詞と異なり、数値化できる判断スケールがない。そのかわり「もっともそれらしい概念（「アイデア」と名付ける）」からの隔たりを、判断スケールとして用いている考えるのが妥当であろう。そこで、“很”は「性質形容詞がその文脈において表そうとする属性、性質、状況、感覚感情がそのアイデア内範疇にある」という判断を表すとみなせる。この“很”が表す判断を「帰属判断」と呼ぶことにする。そうすると、性質形容詞に当てられる判断スケールにも「帰属度スケール」という名称がふさわしいと考えられる。そこで程度副詞の弁別的特徴を「性質形容詞の文脈の中で表す意義が、その意義素が表示する形状、性質、状況、感覚感情のアイデアに、どの程度近いかを帰属度スケールによって判断する」と記述できる。

では、帰属度スケールの実体はなにであろうか？ 数量スケールのように基本的に人間の五感が働いているものではない。しかも、漠然とした感性の働きにより機能するというだけでは語学の分析に役立てることはできない。

程度副詞が独立しては使われることのない「付属語」であるということは、文脈の中で定まる被修飾語の意義について判断をくだす形式であり、統合型のなかで統合意義特徴として被修飾語の文法的意義特徴・語義的意義特徴のどれかと呼応しあう意義を表すと解釈すべきである。文脈には叙述時点と叙述地点が含まれている。その制限下で表される「意義」と、単語そのものが文脈を離れて表示できる「意義素（アイデア）」との間に生じるギャップが、帰属度スケールによって計られると考えるならば、それは意義素論のなかにプロトタイプという概念を持ち込むことに等しい。本稿では、両者に次のような関連付けを行うことにする。¹⁴⁾

ある文脈における、その形式の意義が、意義素の弁別的特徴のすべてを表示している（すなわち抑圧していない）場合、プロトタイプの叙述がなされたと捉える。

さてそこで、ここまでの用法の検討を通して、副詞“很”には次のような文法的意義特徴が含まれていると考えることができよう。

【“很”の文法的意義特徴Ⅰ】

【“很”＋計量形容詞】の統合型において、「被修飾語となる計量形容詞の判断スケール（一定の方向で持って動く）」が、文脈の中で、判断基準とされていた数値を「分割基準」として、被修飾語となる計量形容詞（AaまたはAb）の領域に固定された」と判断をください。

分割基準となった数値との隔たりの程度については、比較方法を用いないので無規定のままである。

【“很”の文法的意義特徴Ⅱ】

【“很”＋性質形容詞】の統合型において、「被修飾語となる性質形容詞」が、「その意義素のアイデア範疇内とみなせる意義」を叙述していると判断をください。

アイデアとの隔たりの程度については、比較方法を用いないので無規定のままである。

② 上記の“很”の文法的意義特徴の裏付けとして、“很”によって修飾されない形容詞（これを「描写形容詞」と呼ぶ）の意義素について検討してみる。形容詞にとって程度差がなく、かつ分割された対となる領域もないことは、文法的意義特徴としてどう解釈すべきだろうか？

描写形容詞の意義素には、ある意義素の中で弁別的特徴の束の中に、示差的特徴として個別的・非体系的な語義的意義特徴または文法的意義特徴が加わっている。本稿では、それらが「アイデア範疇内に存在することを前提とした特殊な属性、性質、状況、感覚知覚であり、他の形容詞に対し示差的特徴となる」ために、“很”から帰属判断をくだされる必要がないと解釈する。そして、それらの描写形容詞の示差的特徴が、統合型内で描写形容詞と組み合わせようとする他の形式（主に名詞）の意義素にとって、「中和」した意義特徴の範囲（不特定の規定しかない。つまり無規定ではないので呼応して、関連意義特徴として表すことはできる。）ならば、組み合わせることができる。不特定の要素を特定化するのであるから、用いられるときには必ず肯定型であり、否定副詞から修飾されることがなく、また合致することを他の形式

(“很”“是”など)で、わざわざ表される必要もない。

※很冰凉, 很黑绿绿的 (描写形容詞)

※很干干净净的, 很红红的 (性質形容詞の重疊形) ⁽¹⁵⁾

※很大的, 很远远的 (計量形容詞の重疊形)

③ さらに“很”の文法的意義特徴の裏付けとなる最も典型的な文的事実として、次のような表現に“很”が使えないということが挙げられる。

形容詞の含まれている統合型が判断結果の程度や数値が変化することを并別の特徴とする統合型の中では使えない。なぜなら、“很”は、「下された判断が固定されていることを表す叙述」、言い替えると、「時間の経過を超越した論理的叙述」を表すからである。

※很大点儿

※很想了家 (cf. “想了家”“很想家”なら使える)

(cf. “很想家了”の“了”は発話時点での変化を表す)

※洗得很干净 (cf. “洗得很干净”なら使える)

このように“很”の文法的意義特徴を規定したうえで、最後に【S4=很+不+Ab=够+Aa+的+了】の統合意義特徴の考察にもどる。

○“不+Ab”は、“很”によって修飾される以上、計量形容詞としての判断結果がAa・Abのうちのどちらかの領域に固定されたこと、すなわち「AbではなくAaの領域側」に固定されたことを表している。言い替えると“很”と統合型内で組合わさることに拠って「分割基準」のどちらにあるかを固定するように求められると、Abの方は“不”の否定により判断スケールの上で反対側Aaの領域へ移行することが決まる。しかも、“很+Aa”という単純な固定に対し、「反対側から判断基準をとびこえて移行してくるので、Aaが文脈の中で表せるプロトタイプ(判断対象にとっての常識基準、期待基準を十分に満たす数値、つまりその物体にとってはAaであるとみなせる数値)」を表すという統合意義特徴が加わると考えられる。そのプロトタイプの叙述を表す統合型が【够+形容詞+的】である。

○一方、“不+Aa”は“Aa”が否定されても“Ab”への領域側に判断結果を移行させれないことを示している。。

【S1= 有+定数量表現+Aa】の統合意義特徴にも現れた「計量知覚を代表して表す」という文法的意義特徴が、分割基準をとびこえて代表権のない方向へと判断を固定することを拒む、と考えるとよいのではなかろうか？

しかも、他の計量知覚を選んで移行する基準もない。

そこで、この【S4】統合型が明らかにした「AbのAaに対する示差的特徴」である文法的意義特徴は次のようになる。

【Abの文法的意義特徴】

計量知覚を代表していないので、否定されることに拠って、分割基準をとびこえた判断結果を表すことができる。

上記の【Abの文法的意義特徴】は言い替えると、【S3②=不+Ab→ 够+Aa+的】の統合意義特徴を、Abを中心として記述し直したものに他ならない。

そこで、【S4=很+不+Ab】の統合意義特徴は次のようにできよう。

【計量形容詞の判断スケールに分割基準を持ち込み、判断方向のどちら側に判断結果が固定されたことを表す“很”+
判断スケールの数値減少領域から数値増加領域へ判断基準をとびこえたことを表す【不+Ab】統合型】

○さて、ここで本稿のインフォーマントが【S4'=很+不+Aa】としてあげた用例を検討する。()内は“很+不+Aa”の中国語解釈)

“很不远”	单位远吗？	骑车5分钟，很不远。	(特别近)
“很不快”	他跑得快吗？	嗯，很不快！	(特别慢)
“很不晚”	现在去，晚吗？	不晚，很不晚。	(一点儿也不晚)
“很不贵”	很贵吗？	嗯，很不贵！	(一点儿也不贵)
“很不多”	车多吗？	很不多。	(一点儿也不多)

これらの形容詞の文法的共通点として、次の2点が挙げられる。

①【S4'】に入る“远”が移動を表す文脈で用いられてることから、この5個の計量形容詞には【S疑問】と【S1】とを比較対照して見いだした、【共通特徴I・I'】（以下、再録）が含まれているといえる。

【共通特徴I】判断対象である物体や出来事の本質とは無関係に、人為的に、その数量を変化させることができる。

【共通特徴I'】判断対象である物体や出来事にとっては、叙述時点で認められる一時的性質（数値）を示す。

一時的な計量であるということが、判断結果に柔軟性をもたす要因の一つになっていると推察できる。

②是否疑問句¹⁰⁾に対する応答句として用いられていることから、次の2つの文脈意義が、応答句に加えられていると考えられる。

①同一の形容詞を用いる、すなわち同領域の数量スケールを用いた叙述を行う。例えば、“远吗？”で質問をし、“远”を用いて答える。

②判断結果の肯定（＝是認）か否定（＝否認）かの述定をくださせる。そのため否定副詞“不”による否認に新情報としての重要度が加わっている。したがって、述語の情報価値がさがり述語形式がなにであっても、是否疑問句は同様の使いやすさを応答句に加える。

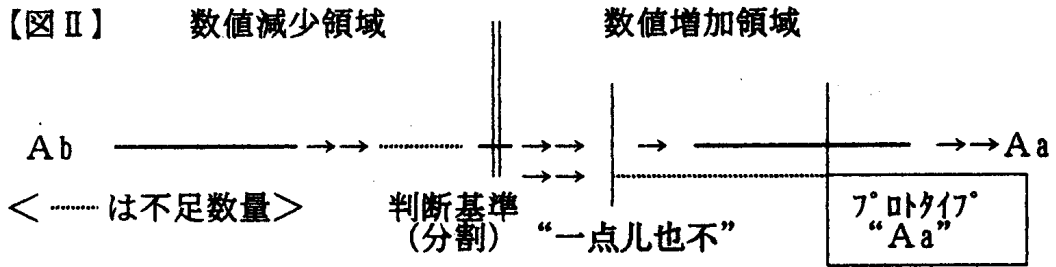
その結果、【S4】の統合型内において、“很”の文法的意義特徴が統合意義特徴として“不+A”に与える影響力が減少したものと推察できる。

ただし、ここで、この5例の統合意義は二つのグループに分かれる。

(1) “很不远” “很不快”は“很不Aa = 特别Ab”の統合意義を表す。すなわち、【S3②= 不+Ab→够+Aa+的】という2つの統合型の変換式の中で、Aaと、Abが入れ替わっている表現と解釈できる。

上記の①②の要因が、Aaの「計量知覚を代表して表す」という示差的特徴を抑圧して、判断基準をとびこえさせたものとみなせる。

(2) “很不晚” “很不贵” “很不多”は“很不Aa = 一点儿也不Aa”の統合意義を表す。この統合意義を図示すると【図II】となる。



この(2)グループの【一点儿+也+不+Aa】の統合意義は、それぞれ“晚”“贵”“多”のAa領域に留まっているが、その文脈において、プロトタイプとみなせる数値、すなわち「常識基準」あるいは「期待基準」を発話場面で別に設定して、「そのプロトタイプからはほど遠い、不足した数値」であることを表している。“晚、贵、多”はあくまで判断基準をとびこえることがない。

本稿のインフォーマントの個人言語においては、“晚”“贵”“多”の意義素の「計量知覚を代表する」示差的特徴が強く意識されているといえよう。

3-4. 2. “晚”と、“早”の用法の入れ替わり

最後に【S3②= 不+Ab→够+Aa+的】統合型の中では、“早”がAa、“晚”がAbとして文法的機能を発揮するという、陸論文の指摘を検討する。他の統合型の中では“早”がAb、“晚”がAa、としての文法的意義特徴を有していたのに、否定形の統合意義に関しては独特の振る舞いをするとして、陸論文では次の用例を挙げている。

他今天起得不晚 [Ab; “晚”は他の統合型ではAaの領域]。

(含有“他今天起得够早 [Aa] 的”意思)

この用例は、時刻の前後を意味している。ただし、この文法現象の成立要因については、何も考察が加えられていない。

本稿のこれまでの考察に基づけば、【够+形容詞A+的】の統合意義は次のように記述できる。

「形容詞Aの判断対象にとっての常識基準、また期待基準となるプロトタイプとしての数値に比べて、充分にその基準を満たしている」

したがって、陸論文での意味解釈は「単純な反義語への移行」をあらわしたのではないと理解できる。しかし、“晩・早”の一对に関してだけに指摘された例外扱いであるために、安定した用法と認めるには不安がある。しかも、本稿がさきに“晩，貴，多”について考察した、「計量知覚を代表する示差的特徴が強く機能する」という特徴とはあいられない用例である。

例えば、本稿のインフォーマントの意義解釈は、陸論文とは異なるが、さらに一貫性のある文法的説明ができそうに思われる。それは“不晩”を

「“起得不晩”⁽¹⁷⁾ = “起得不早” = “起得正好”」

と捉える内省報告である。

このインフォーマントの個人言語では「V得+不+A “晩・早” “貴” “多・少”」の用例において、すべてが“正好”に相当する意味になる。本稿の立場で分析を加えるならば、「プロトタイプとなる基準通りの数値であるとの判断」を示していることになる。この語感が生じる原因として、【S1】の統合意義特徴を考察したときに見いだした“晩・早”の弁別的特徴の存在が考えられる。(再録)

“晩・早”は判断方法の一部、判断基準について「常に時刻を比較するための基準時刻が具体的に存在している」という弁別的特徴を持つ。

【S3④乙 = 不+A→A+了】(→印は肯定型への変換マーク)の例文に対する意義解釈としても、インフォーマントから同様の内省報告があった。

【否定形式に対する語感報告】

もとの偏离 (A+了) 形式	否定形式	インフォーマント語感
他来(得)晚了/早了 他买(得)贵了 他买(得)多了/少了	他来得不晚/不早 他买得不贵 他买得不多/不少	他来得正好 他买得正好 他买得正好

“多・少”については「判断方法が無規定のままであるという、計量形容詞としては特殊な語義をもち、数詞代用機能を持つ」形式として、考察対象から除いておく。より、普遍的な観点からのアプローチが必要と考えられる。

また、“买得不贵”については、買い物に対する社会的関心の高さが“买大了・买小了”という特殊な統合を作っているように、「値段の高低と生活能力（買い物上手）との関連づけが生み出す特殊な表現」として解釈できる。使う場面文脈を調べてみると「通常いくつかの店での値段を比較して述べる」との報告が、他のインフォーマントからもあった。

そして、“晚・早”については、①時刻の前後②基準時点より早すぎるか遅すぎるかの判断、という2種類の語義が、組合わさる動詞、名詞、副詞、さらに使われる統合型によって、選択されるものとみなさねばならない。そして、その選択がどのような原則でなされるかは、より多くの個人言語の調査を待って、統計的に確率の高い選択方式と確率の低い選択方式とを区別してはじめて正確に記述できるようになるはずである。

ここまでの考察を通して、上記の形容詞の用法に共通点がみられるのは、「比較のための判断基準をどのように定めるか」という判断方法について、共通の文法的意義特徴を有しているためとの予想をたてることができる。

しかし、本稿では、陸論文とは明らかに異なる語感、それもかなり体系的な説明が付きそうな語感が存在していることを指摘するにとどめておく。

3-5. 【S5= 老+Aa】における用法の再検討

“老”には弁別的特徴として、どの辞書にも採用されている2種類の語義がある。《現代汉语八百词》では「①ずっと、幾度も：②程度の高いことを表す。形容詞は単音節で積極的な意味を表すもののみ。」とある。

本稿で重点的に取り上げている“远・近”“快・慢”“晚・早”の3対の計量形容詞のうち、陸論文で【S5】で使われると認められているのは、“远”“晚・早”だけである。

もし、“老”の意義素が“很”と同一であるのなら、3対の形容詞すべてと組合わさるはずであるから、“老”の上記②の語義の中に存在する「程度を判断するための条件」が“很”と異なっていると考えねばならない。文体

的に“土”（俗っぽい）表現になるという差異を除いて、“很”との違いを考察していく。

①まず、述語として文を言い切るために、語気助詞“的”を文末に必要とする。すなわち、【S5= 老+Aa】には、陳述をかぶせられるだけの叙述内容が整っていない。いいかえるならば“老+Aa”は、「形式的には単独で主語と結び付けず、文法的には判断対象格を単独で求めることができない」統合型である。

そのことは、連体修飾語としてその判断対象格を修飾する場合に、次のような共起制限を持つことから裏付けられる。

○形状を表す計量形容詞の場合、“老+Aa + (的)”と被修飾語の名詞との間に、必ず“定数量”表現を必要とする。

他吃了老大(的)一个馒头。 ←→※老大(的)几个馒头)

(おっきな饅頭をひとつ食べた。)

○時空を表す計量形容詞の場合、“老远”だけが連体修飾語となれる。“早・晚”の計量知覚をはかる判断スケールは“很”で固定できても、“老”では固定できないことがわかる。

他住在老远的地方。

老远的地方飘过来好香的味儿。(よい香りが遠くから匂ってきた)

又走了老远的一程，才松了一口气。(長い道のりを歩いてやっと一息)

○ただし、様態補語として「V得」型の後ろに用いられる場合は、文末の語気助詞“了/的”を用いても用いなくてもよい。“晚・早”も使える。

他回来得老晚。

他回来得老早。

②次に、連用修飾語としての用法を検討する。

【老+Aa (+地)】の“地”は省略する方が日常的表現である。そのかわり、“就~了/的”“才~(的/呢)”の形式を後に続けねばならない。

(この2形式を、統合型【J型】【C型】と名付けることにする。)

【J型】 “老+远/早+「就+～+了/的」”

【C型】 “老+晚+「才+～(+的/呢)」”

○J型における“远”には、文脈の中にあらわれる何に注目するかによって、数値が増加するとも、数値が減少するとも、2通りの解釈が成り立つ。まず、“老远”を【J型】で用いた用例を挙げる。

他们老远就看到了。 (彼らは遠くからもう見ていた)

好香的味儿老远能就闻到了。 (よい香りが遠くからもう匂っていた)

好香的味儿老远就飘了过来。 (よい香りが遠くからもう漂ってきた)

他老远就跑过来。 (彼は遠くから駆けて来た)

他老远就跑过去。 (彼は遠くから駆けて行った)

以上すべての用例には次の文脈意義が共通している。

- 1) 動作主みずから、または移動する当体そのものが目的地点にむかって移動していく。
- 2) その移動が叙述時点でも継続されている。

さてそこで、遠方を基準地点として、目的地点を目指していく動きに関して、基準地点と目的地点の距離に注目するならば、空間的距離を縮めていく判断スケールの動かしがた (Ab 領域) をとると考えられる。

しかし、移動の様態にだけ注目するならば、移動距離は時間の経過に伴いどんどん伸びていき、“远”は距離を延ばしていく判断スケールの動かしがた (Aa 領域) をとると考えられる。

本稿では“老”が副詞としてもっとも良く使われる用法、すなわち“总”“每次”“一直”と言い替えられる一連の類義語に共通する語義的意義特徴に注目する。それは「動作や状態が、時の経過の中で繰り返されたり、継続する」と叙述することである。この語義的意義特徴が“老远”の統合型の中で“远”を支配していると考えられる。したがって、“远”は動作の継続に伴う「移動している距離が伸びていくこと」を表すと解釈する。

上記のように判断した根拠は2点、挙げられる。

- 1) “远”は単独で連用修飾語としては使えない。したがって、副詞“老”の語義的意義特徴から強い共起制限を加えられている」とみなされる。

2) 【J型】には必ず時の経過を前提とした判断が加えられている。“了”は「発話時点で、叙述内容が現実であることを確認する」，“的”は「発話時点で、叙述内容が現実になっていることを確認する」という、文を言い切るにあたって「話し手が話し手として自分の述べてきた叙述内容をどう捉えているか」という立場表明（これを「述定」と呼ぶ）を表している。したがって、空間的距離ではなく時間的経過という文脈意義（または統合意義特徴）が【J型】によって表されていると考えられる。

○【J型】における“早”は、ずっと時間をさかのぼって設定された基準時点から発話時点にいたるまで、ある状態が継続されていることを表すと解釈できよう。

我们老早就认识了。 (ずっと昔から知り合いです)

“早”は単独で連用修飾語となれる。その場合は【J型】無しの文脈でも、【J型】の中でも、使うことができる。

请今天早（一些）回来。 (早めに帰ってきてください)

他们早就到了。 (とっくに着いています)

“早”が単独で連用修飾語となる文脈では、その意義はこれまで考察してきた計量形容詞としての示差的特徴「ある具体的な時刻（比較のための判断基準）よりも前である」のほかに、「ある出来事が過去のある時刻に事実になる」という、連用修飾語としての統合意義特徴を含むことになる。

さらにまた、事実となった出来事の継続時間に注目するならば、数値のうえでは伸びる一方であり、判断スケールは数値増加方向へと動くことになる。

こう考察を進めてくると、“老早”に特有の統合意義は「状態の継続」であると考えられる。これは“老”によって時間の計測という統合意義が加えられたためと推察できる。

○【C型】における“晚”は、基準時点を起点として、その後、時間がどんどんたつて、やっとなある出来事が現実になったことを表す。

他老晚才回家。 (ずいぶん遅くなってやっと帰った)

“老”は単独で連用修飾語となれる。その場合は【C型】無しの文脈で使うことが圧倒的に多い。

请今天晚(一些)回来。

(遅れて帰ってきてください)

※?他们晚才到。

(遅れてやっと着いた)

出来事が実現するまでに経過していく時間の流れは、動作や状態の裏付けがない、いわば頭脳の中で数えられるものである。基準時点と、いわば出来事実現時点とを抽象的な思惟で対比するならば、“晚”で前後の区別は表せても、「経過した時間が長い」という感覚は副詞“老”から加えられた統合意義特徴で補わねばならないのではないだろうか?

○【J型】【C型】という統合型を通して、“晚・早”の語義的特徴を考察してみると、計量形容詞の対として次のような特徴が見いだされる。すなわち、双方とも連用修飾語として“老”と統合された場合、「数値を増加させていく計量形容詞Aaとしての文法的意義特徴」をもっている。

陸論文が【S3②】で、“晚・早”の関係に、AaとAbの逆転が生じているとみなした語感にも、こういう対としての特殊性が反映されているのかもしれない。

○以上、【S5 = 老 + Aa】の統合意義を検討すると、“很”が形容詞の意義素そのものの判断基準と数値増減の領域をもとに判断をくださるのに対し、“老”は、同じように程度を表すといっても、その求める判断基準が統合型によって異なっていることが判明する。その根拠は次のとおりである。

- (1) 連用修飾語としての統合意義特徴を担う“老 + Aa”では“早”も“远”も、現実となった動作・状態を描写対象とした叙述であり、統合型【J型】によって文脈意義のなかに、被修飾語となる動作・状態に時間的経過が伴うことが表されている。“晚”は描写対象になる出来事が現実になる時刻と文脈の中で設定されている基準時刻とのズレが長いこと、つまり抽象的な時間の経過があることを、統合型【C型】によって表されている。

それに対し“快・(慢)”が“老 + Aa”の統合型のなかで用いられないのは、“快・慢”の意義素そのもののなかに「移動距離を計るために、単位となる時間の経過(または計量)を設定する」という弁別特徴があるからだと考えられる。そこで“很快”ならば、

- 【J型】の中で、“很慢”ならば【C型】で用いることができる。
- (2) 程度副詞“老”は“不”と共起することがない。“老”の修飾対象として“不+計量形容詞”の形式がないことは、“老”が判断する程度というものが「ある方向の数量スケールを一定の判断基準で比較したり、分割したりする」ものでないことを表している。そして連用修飾語として用いられる場合には、「連用修飾語としての統合意義特徴とみなせる、時空に関する情報」を文脈に加えている。否定されることの無い叙述は、わざわざ情報を提供する叙述の営みであり、こういう叙述を「装飾の叙述」として一般の修飾から区別して捉えたい。

したがって、程度副詞としての【老】が表す文法的意義特徴は、装飾の叙述であり、次のように規定できるとものと考えたい。

【“老”の文法的意義特徴Ⅰ】

描写対象となる物体が、その文脈が叙述している叙述時点において、
「一定の状態をたもっていること⁽¹⁰⁾」を、装飾する。
不特定の物体については装飾できない。

【“老”の文法的意義特徴Ⅱ】

その文脈が叙述している叙述時点において、「動作・状態に伴う時間の経過が伴うこと」を、装飾する。

4. おわりに

時間と距離の概念についての論考を目標として筆を進めたのであるが、中国語の形容詞と副詞についての基礎的な意義特徴をひとつひとつ記述しているうちに紙幅が尽きた。手元に収集してある、連用修飾統合型と様態補語統合型に関する資料をもとに、さらに研究をすすめていきたい。

- 1 陆俭明1990, “VA了”述补结构语义分析《汉语学习第1期》pp1-6
 崔永华1982, 与褒贬义形容词相关的句法和词义问题《语言学论丛》第9辑
 pp96-121

上記2論文が挙げた語彙の出入りは次のとおりである。

<p>陆 褒义词</p> <p>均匀, 宽敞, 牢, 满, 明白, 暖, 暖和, 平, 齐, 齐全, 清, 清楚, 全, 确实, 确切, 热, 实, 舒服, 顺, 透彻, 妥当, 旺, 稳, 香, 响, 兴旺, 圆, 匀, 匀称, 直, 准, 仔细, 足, 整齐, 快(锋利), 好, 合理, 合适, 活, 活跃, 简单, 结实</p>	<p>贬义词</p> <p>旧, 空, 枯, 苦, 累, 冷, 凉, 聋, 乱, 偏, 破, 穷, 弱, 散sǎn, 湿, 碎, 疼, 烫, 痛, 弯, 斜, 野, 杂, 脏, 糟, 肿, 皱, 醉, 烂(腐败), 笨, 惨, 干, 错, 钝, 糊涂, 坏, 僵, 饱, 充分, 聪明, 对, 干净, 光</p>
<p>崔 褒义形容词</p> <p>乖, 好, 灵, 香, (这人真)行, 准, 安全, 聪明, 方便, 干净, 高兴, 公平, 好看, 合适, 厚道, 机灵, 积极, 健康, 结实, 宽绰, 利索, 凉快, 灵活, 能干, 暖和, 漂亮, 勤快, 舒服, 顺利, 痛快, 幸福, 整齐, 正常, 正派, 周到, 自然</p>	<p>贬义形容词</p> <p>笨, 丑, 臭, 刁, 饿, 贵, 慌, 坏, 懒, 聋, 乱, 慢, 难, 破, 晚, 悲观, 被动, 别扭, 薄弱, 刺耳, 粗鲁, 粗心, 干巴, 固执, 糊涂, 急躁, 娇气, 可惜, 困难, 罗唆, 落后, 冒失, 难受, 危险, 消极, 小气, 冤枉, 自私, 做作, 好笑</p>

褒義形容詞と貶義形容詞との文法的用法の違いは次のように述べられている。

- 陆 VA了の中に入れて使った場合、“某种结果的实现”(動作の結果)を明らかにするだけであって、“预期结果的偏离”(期待した結果からの逸脱)を明らかにすることはない。褒貶形容詞以外の形容詞については、このどちらの意味を表すかについて名詞や動作動詞との関係に基づき5パターンを認めている。
- 崔 【褒义格式】还(算)~, 还比较~, 蛮(满)~, の中でもちいられるものと、【贬义格式】有点儿~, 有点儿~了, の中で用いられるものとの違いがある。なお、【中性格式】として、~了点儿(了)が挙げられている。

- 2 前掲書(注1)の陆俭明1990, に詳しい。
- 3 文法構造という一般的名称を用いて論をすすめてきたが、以後、「統合型」という述語を用いていく。その定義は次のとおりである。
- 「形式的には自立語を一つは含む、自立語または付属語から構成された2項からな

る単語統合であり、文法的には2項に具体的単語を挿入することによって一定の文法的意義特徴（「統合意義特徴」と名付ける）を表示する、単語統合のパターン」服部四郎1957, 「王育徳氏『台湾語常用語彙』への序」（『言語学の方法』1960, 岩波書店所収p497）には次のようにある。

《白い靴》という単語統合の表す意義は《白い》という自立語の意義素と《靴》という自立語の意義素との和以上のものです。それは、この二つの自立語を統合する《修飾語+被修飾語》という統合型の意義素が更に加わっているからです。（cf. 《白い靴》は原文では音声符号で書かれている）

以下、【S1～S6】の符号をすべて統合型を指すものとして使用する。しかし、統合型という名称を常にその符号の後ろにつけるとは限らない。

- 4 【S6】の文法構造における計量形容詞の用法については、稿を改めて検討する。
- 5 単語の意義素（文法的意義特徴、語義的意義特徴）、統合型の統合意義特徴についての弁別的特徴を本稿では次のように定義する。

その音声形式を言語形式として機能させるに必要な不可欠の意義特徴

- 1) 必ずしも音声形式にみられるような「対をなす特徴」ではない。
- 2) 通常の日常的表現と認められる限り、プロトタイプの意義を叙述するためにはかならず含まれていなければならない。ただし、慣用句、イディオムとしての用法では抑圧されることがある。（cf. 手がはやい…「手」から身体部位という弁別的特徴が削除されている）
- 3) その一部として、他の同レベルの形式の用法と区別するのに必要な「示差的特徴」を含む。

- 6 前掲書（注1）の崔1982, では貶義詞に分類してある。

- 7 Ernst Leisi（鈴木孝夫訳）1952《意味と構造》研究社pp134-135

本稿でいうところの「形容詞の判断スケールで一次元的にはかる」という概念に相当する次のような記述がある。（cf.）は本稿での補注。

ある次元をあらわす形容詞が、‘任意の方向’における指示対象の延長をその条件とする場合には尺度的（cf. スカラールの）と呼び、もし‘一定の’方向における延長をその条件とするならばベクトー的と呼ぶことが出来る。厳密に言うならば、考え得るすべての使い方において完全に尺度的であるような、次元をあらわす形容詞は一つもないのである。……あるものがgroB（c. f. 大きい）と称されるためには、このものが三つの次元のすべてにおいて、相対的にかなりの延長を示すことが普通には必要とされているからである。このようにこれは多次元的延長（一般的には三次元）ということになるけれども、それでも次元の方向は規定されていないのである。

- 8 本稿では弁別的特徴の他に、文法的・語義的意義特徴の意義素内での重要度をランクづけるための分類概念として、「関連特徴（relevant feature）」を認める。

時間と距離に関する中国語形容詞の意味分析 (大滝)

本稿では、関連特徴を国広氏の著作中の記述に基づき、次のように定義する。

国廣哲彌1981《意味論の方法》大修館書店p48, p54,

文化的・情緒的に大多数の話し手によって共有される、その形式によって喚起されるところの心的内容であり、意義素に含まれてはいるが、弁別の特徴とは見なされない。

1) 共に用いられる形式によっては、通常表現のなかでも「抑圧される特徴」となる。(cf. 手を洗う…「手」から最も有効な働きをする一部分・一員という関連特徴が抑圧されている)

2) 共に用いられる形式によって、「選択される特徴」となる。とくに、統合型(または文脈)を通して、統合意義特徴(または文脈意義)と呼応する。

(cf. 手が足りない…最も有効な働きをする一員という関連特徴が選択される)

9 程度副詞“越发”は同一事物の変化についてのみ用いる。

また、述補統合型【動詞+形容詞、自動詞、他動詞】も、動詞が表す動作の開始以前の状態(平相)を旧態基準としたうえで、関連事物がどう変化したかを表示すると解釈できる。

10 马真1988, 「程度副詞在表示程度比较句式中的分布情况考察」《世界汉语教学》第2期

11 本稿の考え方では【太+X+的】統合型が名詞として機能することをこう解釈する。“太”は、「形容詞がその判断対象とする事物について、常識基準と比べて、ある形状、属性、性質、状態などが度を越していること」を表示する。こういう比較する基準が意義素内に示差的特徴として含まれているために、【太+X+的】統合型はその置き換え形式である名詞が表す事物のうち、Xという形状、属性、性質、状態などが特に度を越しているものを表すことになる。

12 中国語では文の終わりを表示する形式としては、「文音調」が唯一必要とされる形式である。したがって、音調がかぶせ易いように、「述語の音節数を調整する」傾向が単語の組み合わせそのものに制限を加えている。“很”も単音節を2音節に整える形式上の要素とみなせるが、しかし同じく単音節の程度副詞“太”“挺”などと比べた場合、やはり独自の文法的意義特徴があるものと考えられる。

13 朱德熙1956, 「现代汉语形容词研究」《语言研究》第一期

14 意義素論は意義素を意義特徴の束または意味特徴のグループがある一定の内部構成(本稿でいうところの意味的事項「判断対象」「判断方法」など)から成立するとみなすものであり、いわゆる素性の束の理論(the theory of feature bundles)のひとつである。また、その素性であるところの文法的意義特徴、語義的意義特徴、文体的意義特徴について、その構成成分としての重要度に3ランクをつける(弁別の特徴、示差的特徴、関連特徴)という方法は、加重素性の束(weighted feature bundles)を認め、問題の意義特徴が相対的にどの程度重要かを示す方法である。

こういう素性の束の理論でプロトタイプ効果を説明しようとする場合に生じる問題点はジョージ・レイコフが指摘している。

George Lakoff 1987, Women, Fire, and Dangerous Things, The University of Chicago Press ; Chapter 7

(『認知意味論』池上嘉彦, 河上誓作他訳; 紀伊国屋書店)

本稿の意味論上の立場は、その批判をふまえたうえで、成層文法の観点を取り入れた文法的意義特徴の4段階の区別、および文脈意義の影響による意義特徴の抑圧と選択の区別、意義素と現象素との指示関係による想像的命題の解釈、などを試みるものである。しかし、今は詳述をさける。

- 15 本稿のインフォーマントは、性質形容詞の重畳形については抵抗無く使えるとした。例えば“脸很红红的”(顔色が健康色である)など。ただし、陸論文をはじめ、呂叔相主編1980《現代汉语八百词》商务印书馆;の“很”の項目にはこうある。

形容詞の強調形は“很”の修飾を受けない。

※～雪白 ※～红红的 ※～白花花 ※～酸不溜湫的

- 16 本稿では、従来言われてきた「疑問文」と「応答文」を対にして、「疑問句」「応答句」と呼びかえる。そして疑問句は叙述または述定に関する文法的意義特徴が欠如した、複文の前半句と捉える。応答句の方は叙述の完成と述定(及び伝達)の完成した、複文の後半句と捉える。したがって、疑問句の叙述内容は、応答句に対して文脈意義と伝達に関する文法的意義特徴を提供するとみなすことになる。

- 17 「朝早く起きた」ことを“不晚”で表現するには、断定の語気助詞“可”を使い“起得可不晚。”と言うとの報告があった。

- 18 「物体についての形状を表す場合にも、否定形式をもたない」という用法上の特徴を、文法的意義特徴として記述した表現である。稿をあらためて考察したい。

補記

本稿のインフォーマントとして邵璞氏(1959年生・沈阳で18才まで過ごす、上海復旦大学卒業後、北京在住)に御協力いただいた。ここに感謝の意を表します。